

令和4年度 第3回 学校運営協議会

1 日 時 令和5年2月15日(水) 午前9時30分から午前11時まで

2 場 所 静岡県立伊豆の国特別支援学校 会議室

3 参加者

○学校運営協議会委員

若林 高至 様 なのはな相談室 室長
山田 芳治 様 社会福祉法人春風会 障がい統括施設長
中村 裕子 様 伊豆の国市韮山地区 民生委員・児童委員 主任児童委員
東方 慶 様 三島市手をつなぐ育成会 理事
山元 薫 様 静岡大学 教育学部 特別支援教育 准教授
宇佐美 祐三様 伊豆の国特別支援学校 P T A会長

○教職員

校 長 早田 公子 副校長 廣瀬かよ子 教 頭 植松 隆洋
事務長 鈴木 健夫 小学部主事 渡邊 康子 中学部主事 水野 靖弘
高等部主事 伊賀 美紀 教務課長 岩谷 俊宏

4 内 容 【進行】山元コーディネーター

(1)開会

(2)校長挨拶

(3)協議等

令和4年度学校経営の報告について

令和5年度の学校経営方針について

学校運営協議会委員から感想や質疑

(4)閉会

5 議事録

校長挨拶

校長

1月18日に行った公開授業研究会について報告。

- ・コロナ禍であったが、県内約50名の先生方が来校し、授業について議論を行い多くの助言をいただくことができた。
- ・開校にあたり専門性の高い教員集団を目指し、国語・算数/数学の授業をすべて公開することができた。本校の授業実践が本になり、著者伊豆の国特別支援学校として今月末に出版される。
- ・実践の成果をポスター発表として行った。自主的に18名の教員が発表した。新しい教育を積み上げていこうという思いが見られ、これからを担う人材が育ってきている。
- ・児童生徒は、1つ1つ力を確実に積み上げてきている。自分の思いを伝えようという思いが強くなったり、それぞれに応じた方法で伝えようとしていたりしている。自分で考える姿が多く見られるようになった。

次年度に向けてさらによりよい学校としていくために、御意見・御助言をいただきたい。

令和4年度学校経営報告

部主事 (1)つなぐつながるプロジェクト実績報告

- コーディネーター
- ・学校間交流、地域交流、居住地校交流、地域への発信、地域資源の活用、センター的機能について、小学部、中学部、高等部の成果と課題を報告。今年度の成果を来年度も継続していきたい。
 - ・地域への発信では、新聞への掲載が効果が高く、多くの方に読んでいただくことができた。
 - ・センター的機能については、高等学校からのニーズも高まり、高等学校の支援体制の構築について一緒に行っている状況である。

副校長 (2)校歌完成報告

- ・2年かけて作成した。作詞は本校、分校の児童生徒、職員全員から学校の良さや好きなところを募集し、その言葉を「輝くなぎの木」としてまとめ、教員で詞を作成した。
- ・曲は音楽科の教員を中心に校歌作成委員メンバーが、メロディと伴奏、サインを作成した。
- ・児童生徒が、なぎの木の成長と自分たちを重ね、良さを力に輝かせながら成長していく自分たちを感じてほしい。

副校長 (3)学校自己評価報告

- ・教員の自己評価が高い。また、外部からも高い評価をいただいた。指導力・専門性が高まっていることを教員自身も実感している。
- ・教材についてはまだ揃わないものもある状況である。
- ・つなぐつながるプロジェクトについては、来年度の目標やねらいを整理した取り組みとしていきたい。
- ・活発に意見がさらに言える組織としていきたい。

教務課長 (4)保護者学校評価報告

- ・どの項目についてもよい評価が昨年度より増加している。児童生徒、保護者と共に願う姿を共有し、個々の人権を尊重し、いきいきと活躍できる教育活動が実施されていると言える。
- ・今後も児童生徒、保護者と将来の生活が豊かになることめざして取り組んできたい。また、活動の意図を伝えていくことで、充実を図りたい。参観については高評価のため、直接見ていただく機会を各学部で引き続き工夫して設定していきたい。

委員より質疑

- 委員
- ・自己評価が高いということは、やりがいをもって取り組んでくれているということ。教員の自己肯定感が高い教育現場はとてもよいことである。
 - ・ホームページで世間との交流が推進される。情報の発信はもっと工夫する必要がある。見る人が見てみたいと思い、わくわくするようなものになるとよい。

委員

- ・蕪山地区特別支援教育協議会の設置の経緯は？

一校長：本校の開校で、地域に特別支援学校が1校増えたことで、この蕪山地区におけるインクルーシブ教育システムの構築と充実を目指す。交流教育も義務教育9年間の中で系統的に考えられるようにするために設置した。

- ・伊豆総合高校とのものづくりを介した交流は、特徴がいかされてよい。
- ・自己評価では、やりがいや専門性の向上が高いのがよい。ラーニングマップやシラバスと形にしているところがよい。実践を本にまとめるなど形に残ることで、

積み重ねの実感ややりがいにもつながっていると思う。

委員

- ・コロナ禍の中であるが、児童生徒や教員と一生懸命に取り組んでいる。それが保護者にどう伝わっているか。いろいろなツールを通して伝えていくことが大事である。
- ・地域資源の活用について、もっとPRしてもよい。画面では伝わりにくいことをどのように伝えていくかを工夫したい。
- ・校歌を一丸になって作りあげたことはとても素晴らしいことである。

委員

- ・校歌を自分たちで作る、みんなの声が集まり、みんなにとって大事なものができた。
- ・今年度、学校で当事者の声を聞く講演会を持った。その成果として、校内に当事者に寄り添う姿勢が教員同士で共有されていると感じる。そのような実践の中で、児童生徒が育っていくと思う。
- ・現在は、働く保護者も増えている。保護者に寄り添う支援として、小学部の始めは保護者自身も毎日の生活でいっぱいであるということを、学校側も理解していくことも大切である。
- ・校内での12年間の繋がりと合わせて、高等部卒業後の引継ぎも移行支援会議の中で、本人の成長として進路先に理解してもらえると、よりよい社会生活への繋がりとなりうれしい。
- ・ホームページは見ようとしてアクセスして見るもの。工夫が必要である。その中で、ホームページに新たに設置されたギャラリーコーナーに掲載されている児童生徒の図工美術の作品は、とても素晴らしい。

委員

- ・仕事にとってやりがいはとても大事である。そのような教員が多くうれしく思う。
- ・特別支援学校の中で、なぜ人権ということを言葉にして重点目標としたのか？
一校長：人権はどこの特別支援学校でも重点としているが、本校で特に大事にしているのは「日常の人権感覚を磨くこと」と考えている。そのために、月1回定期的にチェックをしている。
- ・居住地校交流については？
一校長：年1・2回、希望制で実施している。
- ・民生委員対象研修会で静岡きょうだい会の代表の話を伺った。ヤングケアラーなどが昨今問題となっているが、代表本人は「意識はしていなくて何とも思っていなかった。ただ、周囲に兄弟姉妹のことを聞かれるといろいろな思いはあった。何気ない会話が心に重く感じることもあった。逆に自分のことを気にかけてもらった時、とてもうれしかった。」とのことであった。きょうだい会の方のお話から、周りの大人が、周囲のちょっとした言葉掛け、視線等、気にかけて接することが大切と感じた。

委員

- ・つなぐつながるプロジェクトは、小中高それぞれ等身大の交流ができています。自然に生活の中に地域があり、地続きで広がっていくとよい。そのためにも、カリキュラムマネジメントを確実に実行し、交流等をイベントではなく、学習の一環として取り組み、教員間で行う意味や目的を理解するとよい。一年目は点、二年目は線、三年目は面になりそして立体へ…、これから交流の精選、発展、充実が必要である。
- ・教員の専門性について98%が実感していることはとてもよい。いい実践をしているので、今後、学校としても、教員一人一人としても、どう維持していくかが大切である。

- ・保護者の評価はB（だいたいそう思う）が多い。A（大変そう思う）にできていくとよい。
- ・保護者は個別の教育支援計画、指導計画とはどのようなものか学ぶ機会がないため、意味を知らない保護者もいる。丁寧に説明する機会があったほうがよい。教員にとっても改めて学び説明できるようにしたほうがよい。
- ・取組目標の安心安全について。教員の使命として児童生徒の人権をどう守っていくか、インクルージョンに向けて児童生徒の権利を保障していく意識を持つことが大切である。そのステップとして、特別支援学校でインクルージョンへの意識をどのように扱っていくか。次の課題になると思う。

令和5年度経営方針

校長 来年度は学校経営計画の方針としては大きく変えないが、その中でさらに充実を図っていききたい。つなぐつながるプロジェクトについては、今年度はまずやってみるということであったが、来年度は目的意識をもって取り組めるようにしたい。保護者に「～をしています。その意義や目的は～です」と教職員が共通理解のもとしっかり伝えられるように、意義やねらいの理解をベースにした教育活動を重視したいと考えている。